各地で話題の病害虫

ナスコナカイガラムシ

学名：*Phenacoccus solani* Ferris

英名：Solanum mealybug

2000年2月、高知県の促成ピーマンにこれまで見られなかったコナカイガラムシが発生し、排泄物によるすす病などの被害が見られた。東京農業大学河合省三博士による同定の結果、国内未記録のナスコナカイガラムシであることが判明した。また、2002年に高知県病害虫防除所が調査した結果、促成シシトウ、ナスにおいても発生が確認された。

本種は北米、中南米、ハワイ、ミクロネシア、南アフリカ、ジンバブエ等に分布する。広食性

高知県農業技術センター　山下泉氏提供

で雑草を含むキク科、ナス科、マメ科等25科の寄主植物が報告されている。

成熟雌成虫は楕円形で体長3mmを超え、体表は白色粉状のロウ質分泌物に覆われている。体周縁のロウ質物の突起は短く目立たない。プレパラート標本で検鏡すると、体周縁のロウ座刺毛や体背面の刺毛の基部はくびれている。卵胎生を行うので、一般的なコナカイガラムシに見られる卵のうは形成されない。また、雄は見られず単為生殖を行う。

本種は主に葉や茎に寄生しているが、海外では下位葉や地下部に寄生するとの報告がある。

被害は、本種の排泄物によってすす病が発生するため茎葉や果実を汚し、商品価値を低下させる。

ピーマンには登録農薬として、チアメトキサム水溶剤があるが、シシトウ、ナスには現在のところなく、有効な防除薬剤の登録が望まれる。また、早期発見に努め捕殺することも重要な防除法の1つである。

キクわい化病

病原体：*Chrysanthemum stunt viroid* (CSVd)

2002年5月、長崎県で施設栽培のキクにわい化症状を示す株が認められた。長崎県総合農林試験場で遺伝子診断（RT-PCR法）による検定を行ったところ、キクわい化ウイロイド(CSVd)が検出され本病であることが確認された。

本病は、1977年に静岡県で初めて確認されて以来、全国各地で発生し問題になっている。九州では、福岡県、熊本県、宮崎県、鹿児島県で確認されている。

長崎県病害虫防除所　高田裕司氏提供

本病に感染したキクは、健全株に比べて節間が短縮し草丈が著しくわい化する。葉は淡緑化、小型化し、茎との角度が小さくなり直立して生育する傾向にある。花も小型化し、赤色の品種では退色し、開花期が正常の個体に比べて早くなる。病徴は高温（20～30℃）で出やすく、19℃以下では感染していても症状は出にくい。病徴の発現には品種間差が見られる。

本病原体の寄主範囲はキク科植物に限られている。CSVdは摘蕾、刈り込み等の作業で汁液の接触や刃物から伝染する。虫媒伝染、種子伝染、土壌伝染はしないが、罹病根の接触により隣接株に伝染する可能性がある。

本病の防除対策としては、無病苗の利用が最も有効であり、特に新しい品種や親株を導入した場合、本病の病徴に留意する。発病株は速やかに除去するとともに、作業時には、刃物をこまめに加熱消毒し、汁液伝染防止に努めることが重要である。

農林水産省